A piece of GOLD

A Piece of Gold 2025 | Shibuya Hikarie 8/ CUBE 1,2,3 2025/02/17-26

Product Description - 作品展示・解説

Ami Masamitsu 01

正光亜実の『EMBROIDERY』は、薄くフラットなリングに施された緻密な装飾が特徴的な作品です。細く撚ったゴールドワイヤーを手作業で文字や図柄に成形し、レーザー溶接で接着しています。シンプルなリングに複雑なディテールが美しいコントラストを生み出しています。限られた地金の量でいかにジュエリーを充実させることができるかを追求した作品です。
純金は非常に柔らかく、変形しやすいため実用的ではありませんが、『NEST』は純金特有のうつくしい色合いを日常的に楽しみつつ、実用性も確保したリングです。細い溝に純金のリングをぴったりとはめることで、まるで卵を守る巣のように、シルバーのリングは純金のリングを優しく保護しています。物性の違いに着眼することで純金の存在感をうまく伝えています。

EMBROIDERY
A Piece of Gold | 4.8g
DEUX MOI | 4.6g
Handle with CARE | 3.9g
m | 1.9g
MIZPAH | 3.5g
SOMETHING DIFFERENT | 4.6g
NEST | 8.5g

02 ATAKA

Sheet | 0.25g, 0.6g, 0.85g
Yellow | 3.6g

ATAKA の Sheet は、「ピアスを留める」という機能の再構築を試みた作品です。従来の制約にとらわれることなく、ピアスのポストとキャッチをシンプルな手法で一体化させ、機能にミニマルな美しさを与えています。
Yellow は、ゴールドと真鍮の特性を際立たせたジュエリーです。磨きたては似た金色ですが、経年変化により真鍮は深みを増し、ゴールドはその色合いを保ち続けます。「育てるジュエリーとはなにか」という問いから生まれたこの作品は、変化しながら成長する美しさを身に着ける楽しみを提供します。

03 Christopher - Thompson Royds

Natura Morta
Buttercup Stud | 2.5g
Cornflower Drop | 3.5g

花や植物への深い愛情を写実的に表現した作品を制作する一方で、ゴールドを抽象的にカットアウトし、薄い板に塗装しただけのこの作品との対比が非常に興味深いです。花が持つ可憐な存在感をジュエリーとして昇華させ、身につけるだけでなく、花本来の佇まいの美しさをオブジェとして引き立て、より力強さを際立たせるようデザインされています。

Daigo Ohmura 04

spice and gold | 0.9g

大村大悟は自然界に存在するさまざまな素材を扱い、作品を通して人類と自然の関わりやものの価値について視覚的に表現するアーティストです。大村にとっての金は安定性と普遍性を象徴する存在であり、文化の交流や、人類と自然物との関わりの歴史を想起させるものとして彼の作品に度々登場する素材です。『spice and gold』と名付けられた作品は、中世の交易において胡椒と純金が同じ重さで取引されていたという歴史的事実に着想を得ています。同価値として扱われていた胡椒と純金を並べることで、二つの物質の価値がどのように文化的・歴史的な文脈の中で変容してきたのかを想像させるとともに、私たちが金に対して抱く「質」、「価値」、「意味」という固定観念に対して相対的な視点を与えています。

05 Dan Tomimatsu

EQU | 2.7g
ENLINK | 4.8g

Equal ＝等しいという単語から名付けられた『EQU』は、すべてのサイズのリングが同じ長さの薄いゴールドの板からつくられます。５号の小さなリングも、24 号の大きなリングも、すべて同じ量、重さ、長さの地金を使用し、価格も同じです。同じ価値を共有するというコンセプトをシンプルに質量に置き換えた、優れたデザインです。
（端が留められていないものは製作過程のサンプルです。）

『ENLINK』は、富松のルーツである奈良に伝わる「金糸」をモチーフにした作品です。中世日本では、西洋のように宝石を身につける文化の代わりに、着物に金箔を織り込むことで権力や美を象徴しました。金糸は、和紙に漆を塗り、金箔を貼り付け、裁断して糸に撚るという複雑な工程を経て、６軒の職人が約２か月をかけて完成させる伝統素材です。古来の金糸に現代的な解釈を加えた作品です。

06

Etsuko Sonobe

Ingot 999.9 in the ring | 9.8g, 13.6g, 18.9g

薗部悦子が本展のために制作した作品は、純金のインゴットを 18K ゴールドで作られた箱に収めたリングです。純金のインゴットは完全には固定されておらず、箱の下部からわずかに見え隠れします。リングを指にはめると、純金は見えなくなりますが、その温かな金の感触を肌で感じることができます。この不安定に配置された純金のインゴットは、社会情勢と人とゴールドの関係性をシニカルに映し出し、私たちが本当に大切にすべきものは何かを問いかけます。薗部のジュエリーに共通する洗練された造形美はさることながら、A Piece of Gold というコンセプトが合理的に無駄なくデザインされている作品です。

07

Hongxia Wang

Ennui | 0.5g, 2.2g
The Naked Collection | 1.5g, 1.7g

「壮大なインスピレーションもコンセプトもありません。ただシンプルに退屈の中に着想を得るのです」とホンシャ・ワンは語ります。ただ、気の向くままに白紙のスケッチブックへドローイングを描くようにして、この有機的なフォルムを生み出していきます。『Ennui』では針を使い、細かな線状のテクスチャーを作り出します。ロストワックス法でつくられた一点ものの作品は、その時々の作者の感性が生々しく反映された、絵画的なゴールドジュエリーと言えるでしょう。

08

Karin Johansson

Family | 6.0g
Fire | 4.3g
Line | 4.8g
Line/Time | 12.7g
Luck | 2.5g
Sun | 7.4g

ゴールドに宝石ではなく安価なアクリルを大胆に組み合わせているのがユニークなカリン・ヨハンソンの作品。金属は冷たい素材であるのに、ゴールドの表面に加えられた一手間の表情によって金属を冷たくないものに見せることに成功しています。間合いの取り方やボリュームのバランス感覚、エッジの処理の仕方から、彼女のおおらかさが伝わってきます。

09

Kensaku Oshiro

Vis-à-vis | 2.1g, 3.5g

ミラノ在住のデザイナー大城健作が手がけたこの作品は、繊細なフォルムや面の構成を追求する彼の美学を、ジュエリーという最小スケールで表現した作品です。金そのものの美しい輝きを幾何学よって際立たせ、表裏一体の造形へと結晶化させた、ミニマルでありながら存在感のあるデザインとして成立しています。

10

Kim Buck

En kort, en lang | 1.6g
Fix and Wear | 0.7g
Gludgubber | 1.2g

金細工職人の見習いを経てジョージ・ジェンセンなどにデザインを提供してきたキム・バック。
『Fix and Wear』は 1 本のゴールドワイヤーでダイヤモンドを挟み、ひねって留めるという非常に合理的でシンプルなデザインですが、高度な技術力なしには実現できません。90 年代にデザインされたとは思えない、タイムレスなデザインです。
ゴールドの柔らかさを利用して制作された『Gludgubber』は、スカンジナビア鉄器時代に作られたお守りであるグルドグッベにインスピレーションを得ています。古典的なジュエリーの象徴であるハートの古いペンダントネックレスを型に純金 999 ゴールドに転写する技法を用い、それをそのまま現代的なネックレスのデザインに落とし込んでいます。
デンマーク語で「短いと長い」を意味する『En kort, en lang』は、重力の作用によって短いゴールドと長いゴールドの 2 本が交差し十字を形成するという、シンプルで明快なアイデアをデザインに取り入れたネックレスです。

11

Lin Cheung

Delayed Reactions | - g
Distracted | 24.8g
Interruption | 14.1g
Memoria | 1.2g, 1.3g, 1.5g
More or Less | 0.7g, 27.4g
Undone | 10.5g

ゴールドという特別な素材を使い、日常に潜む美しい形に光を当てているのがリン・チャンです。端がねじられたワイヤーや缶バッジ、既製品のピアスキャッチなど、彼女が心をぐっと掴まれたものをシンプルにゴールドに置き換えることで、見過ごされがちなものへの愛着を表現しています。18 カラットのカラーゴールドが繋ぎ合わされたネックレス『Undone』は、本展のために制作された新作です。

Lucie Gledhill 12

Chain | 2.4g
Fishbone | 2.1g
Solder Seam Stud | 0.8g

チェーンメイキングはルーシー・グレッドヒルの作品のシグニチャーと言えます。ひとつひとつのチェーンを手作業でつくり、その手作業の痕跡＝ハンマーで叩いた痕や地金同士をくっつけるためのロウ付の痕を敢えてそのまま剥き出しに見せることで、作者の素材との対話をありのままデザインに生かしたリングを多数作っています。

『Solder Seam Stud』はシルバーとゴールドの融点の違いを利用したユニークな作品です。彼女はまず、シルバーでリングを制作します。そして敢えてシルバーよりも融点の高い金のロウで断面同士を接着し、その後シルバーのリング部分を全て溶かしてしまいます。手元に残った 18 金のロウは、溶けた瞬間の形や状況をそのままに写し取った、いわばロウの化石です。ロウそのものをピアスにしてしまうという発想が唯一無二のアイデアと言えるでしょう。

Marc Monzó 13

FIRE | 0.75g, 5.8g
SUN | 2.7g

とても薄いゴールドの板を使いながら全く異なる表情を備えているのがマーク・モンゾによる『SUN』と『FIRE』です。『SUN』では波のような曲線の起伏によって繊細な光の反射を演出し、『FIRE』では紙をくしゃっと丸めたような柔らかなフォルムの内側に鮮やかで力強い光の反射を作り出しています。限りなく軽量のゴールドを用いて太陽と炎を表現できるところに作家のデザイン力の高さを感じます。

14 Mari Kobayashi

Knitting | 2.0g, 3.8g, 7.8g
Modern Châtelaine Bag | 5.1g

ゴールドの細い輪という一つの要素の連続性が視覚的に満たされるジュエリーを作っているのが小林茉莉です。同じサイズの輪を延々と繋いでいく作業は想像するだけで気が遠くなりますが、彼女はこの繰り返しの作業に心地良ささえ感じ、軽やかに作り上げていきます。こうして出来上がった作品には、空気をはらんだ編み物のような軽やかさが宿っています。

Sayumi Yokouchi 16

COIL | 1.2g, 3.0g, 4.0g
GOLD STAR | 3.3g, 4.5g

まるでお菓子のような愛らしいフォルムをした『COIL』は 1 本のゴールドワイヤーをコイル状にしていくというシンプルな技法で作られたピアスです。重ねられ、またところどころロウ付けされることによって強度を携え、プロダクトとしての耐久性が軽やかに設計されていることに肩の力が抜けたデザイン性を感じます。

『GOLD STAR』では、純度が高くなればなるほどジュエリーとしての実用性から遠ざかるというゴールドの性質を逆手に取り、純金が持つ柔らかさやそれゆえに予想される変形を楽しむことを提案しています。
金属の硬さと柔らかさを巧みに取り入れた彼女の作品からデザイナーとしての柔軟性が見て取れます。

15 Marta Boan

Fact | 0.5g
Hoop Line | 0.5g
Signet Ring | 3.0g
Signet Stone Ring | 1.2g

１g のゴールドに出来るだけシンプルな処理でかたちを与えた作品が『Fact』と名付けられたピアスのシリーズです。身につけた時により魅力を感じるフォルムは、日常に潜む些細な気づきをインスピレーションにデザイナー独自のルールによって生み出されています。
‘Signet Ring’ は紀元前から印鑑としての役割を備えたリングとして広く普及し、最古ともいわれるリングです。現代においては印鑑として使用されることは完全になくなりました。このシグネットリング（*a）の要素を最小限に削ぎ落とした作品です。ゴールドの板に切れ込みを入れて折り曲げるというミニマルな要素でシグネットリングのシルエットを象り、機能的な意味を持たなくなった現実をエフォートレスに表現したユニークなリングです。

17 Scarlett Zhang

Absence Ring | 0.7g, Earring | 1.1g, 3.1g
Self-Portrait | 0.7g, 1.2g

スカーレット・ジャンは、既存の技法や発想にとらわれることなく、豊かな創造力を武器にジュエリー制作に取り組む作家です。『不在（absence)』と名付けられた作品は、ゴールドの輝きを宝石の煌めきに見立てるという独創的なアイデアに基づいています。宝石の「不在」によって生み出される美しさは、手作業で小さく折り畳まれたゴールドをレーザー溶接で繋ぎ合わせることで実現されています。存在しないものがその価値を際立たせるという、人間の感情の不条理さを表現した作品です。

18 ATAKA

Au0-999.9

Au0 から Au999.9 まで 21 種類の地金を配列した本作は、金という素材の物質的・文化的多様性を可視化する試みです。金相場の高騰により、ゴールドジュエリーの定番＝ Au750（18 金）という慣習だけでなく、現在の国際標準規格（ISO 9202）自体も再考を迫られる未来が来るかもしれません。本作は、新たな基準や価値観が生まれる過渡期の断片として､私たちが無意識に抱く「金」の固定観念を揺さぶり、素材の在り方そのものを問い直します。

19 Louis Tamlyn

Rush Hour: A Dash of Gold

ルイ・タムリンは紙を使ったコラージュを専門とするアーティストです。彼は作品の外観に軽さを与える素材に惹かれており、薄い紙に淡彩画の技法を頻繁に使っています。
この作品は、一見すると楽しく遊び心のある子供向けのパズルのように見えるかもしれません。しかし、タイトルがやや滑稽に示すように、これは常に動き回り時に混沌な私たち大人の日々の現実を表現しています。
ここで、遊び心を不思議な感覚へと引き上げているのが、約１ｇの金箔です。紙に金箔を使うことで、瞬時に後者が前者を昇華します。ほんの僅かなでも洗練された素材が加わったことで、遊び心が贅沢な何かに様変わりしています。
また、紙や金箔といった東洋の書道の素材を木製のパズルに組み合わせることで、彼は東洋と西洋の影響を融合させています。
そして、作品にある道路はパズルの外でもつながっています。パズルを完成させる工程で異なる場所や文化がつながったという背景があります。タムリンは木材と紙でベースをフランスで作り、台湾で金箔を入手し貼り付け、最後に完成品を日本に輸送しました。また、彼は友人でもあるオーストラリア人アーティストのジャック・ルイスと協業し、彼におもちゃの車を作ってもらっています。私たちの世界の複雑で混沌とした接点をお茶目に子供の玩具に集約した作品です。

20 Simon Taylor

Rosendahl’s Bend | 11.7g

イギリスのクリエイティブ集団「TOMATO」の創設者、サイモン・テイラーは 1990 年代からグラフィック、映像、ファッション、建築など幅広い分野で活躍し、映画『トレインスポッティング』のアートワークや Underworld のミュージックビデオを手がけてきました。
彼は今回の制作において、「ゴールド」という素材の社会的な位置付けや人間との関係性をテーマに据えています。
彼が提示したコンセプトは、次の言葉で始まります。

“We are ‘Bound’ to gold, its influence is inescapable and enigmatic.”
(わたしたちは金に縛られている。その影響からは逃れられず、全てを理解することは難しい。)

このメッセージを出発点として、現代社会を映し出す象徴的なオブジェとリングがデザインされました。

21 Ami Masamitsu

HOME JEWELLERY Masterpiece from 30s | 9.7g

『HOME JEWELELRY』は『EMBROIDERY』*(01)* と同じ技法を用いてゴールドの新しい保有の仕方をする提案作品です。ゴールドは実物資産としての価値から投資目的で金塊として広く保有されています。しかし、デザイナーは人々の心に訴えかけるこの素材の数値化できない本質を見つめています。この作品は、金の情緒的価値の探求でもあります。

*a)「シグネットリング」は、いわゆる指輪型の印章。リング上部の紋章を熱い蝋に捺すことで、持ち主の認証の証しとして文書や手紙に使われた。